

■ 自 著 紹 介 ■

現代日本政治の現状と課題



浅野一弘 著
同文館出版
2007.9

2001年4月26日にスタートした小泉純一郎政権は、戦後3番目の長期政権となった。小泉政権下の1980日間において、日本の政治は、よきにつけ、悪しきにつけ、大きな変化をとげた。

たとえば、小泉首相は、“ワンフレーズ・ポリティクス”や“劇場型政治”ということばにみられるように、有権者と現実政治との距離をちぢめたという意味では、大きな功績があったかもしれない。

だが、“ワンフレーズ・ポリティクス”ということばの背後には、小泉首相が、十分な説明責任（アカウントビリティ）をはたさないまま、政権運営にあたってきたという事実があったことを忘れてはならない。したがって、われわれは、小泉政権の“プラス”の部

分にだけ光をあてるのではなく、さまざまな“マイナス”の側面にも目をむけなければならないのだ。

そこで、本書において、小泉政権下での政治課題を中心に、現代日本政治のかかえる問題点の一端を浮き彫りにしたいと考えた。とりわけ、国会、地方議会、政務調査費、日米関係、在日米軍再編、日米経済摩擦、個人情報保護、聖域なき構造改革といったキーワードに着目しつつ、小泉政権の実態にせまったつもりである。当初の目的がどれほどたっせられているかについて、読者諸氏の手厳しいご批判をたまわれれば幸甚である。[312.1 | A87]

(法学部准教授 浅野一弘)

文集百首全釈 [歌合・定数歌全釈叢書:8]



文集百首研究会 著
風間書房
2007.2

『文集百首』とは、建保六(1218)年に慈円が『白氏文集』から百の詩句を選び、句題として和歌を読み、藤原定家にも同じ句題で和歌を詠むよう持ちかけたものである。『愚管抄』の作者としても知られる慈円は、甥良経亡き後、良経の息子道家と立子の後見として九条家を支える重責ある立場になっていた。

この時期は、前年天台座主を辞退し、叡山との確執があり、後鳥羽院の心が親幕派の九条家から離れる時期で、辛い状況だった。後に、立子には順徳天皇との間に皇太子(後の仲恭天皇)が生まれ、道家の息子頼経が鎌倉幕府四代将軍となったが、『文集百首』は、それらの前の不安定な時期に編纂された。

慈円と同じく文人政治家であった菅原道真を祭る北野天満宮に奉納されたのも、九条家の命運を神にすがり気持ちからであった。しかも今まであまり詠

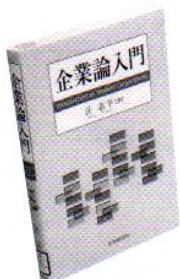
まなかつた句題和歌で奉納したのは、閑居・隠遁生活に憧れながら、官人として生きた白楽天に慈円が親近感を覚えたからであろう。

慈円の気持ちを表すように、『白氏文集』から採句された詩句は、それまでの日本文学ではほとんど顧みられなかった閑居詩群から取られていた。ここにも、重い現実から逃避したい気持ちが表れている。

自分の不安や逃避を和歌に託した慈円に比べ、見慣れない句題をもちかけられた定家は、専門歌人としてのプロ意識で、伝統的結題の手法で詠んでいる。本書は、同じ句題を両者がいかに詠んでいるかを一首ごとに注釈しながら比較し、二人の和歌観の違いを明らかにしたものである。[911.18 | U96 || 8]

(文化学部准教授 田中幹子)

企業論入門



汪志平 著
中央経済社
2007.4

今日、世の中の転変のスピードは極めて速く、あらゆるもののライフサイクルが短くなってきている。企業を取り巻く環境の変化も激しく、経営に大きな影響を及ぼすような変化が頻発している。

周知のように、2006年5月1日に「会社法」が施行された。この新たな法律によって、企業形態としての有限会社の新設が認められなくなり、合同会社なる新しい形態が導入されることとなった。さらに株式会社に関するガバナンス構造が極めて多様なものに変えられた。そして、話題になることが多くなるM&Aや組織再編などについても新たな規定が設けられたのである。これらの変化に適應するために、本書は前著の『企業形態要論』(中央経済社、2001

年5月)をベースにして書き直しを行った。

各章の冒頭に、この章で学ぶキーワード10個前後を厳選し提示している。また各章の本文の後ろに演習問題を2~3問を設けている。解答やヒントは提示していないが、各問とも本文を読んで学習すれば解答できることになっている。各章末に文献を日本語で書かれた書物に限定して5冊程度を提示している。特に一読をお勧めしたいものは★のマークをつけている。

本書は企業形態論と企業社会論の入門書であり、読者として学部2~3年生を想定しているため、執筆に当たってはできるだけ図表による説明を心がけた。[335 | O11]

(経営学部教授 汪志平)